

2025年12月28日 降誕節第1主日「悲しみを忘れない」 北川逸英師

イザヤ 63:7~9 ヘブライ 2:10~18 マタイ 2:13~23

もうすぐ、2025年が終わろうとしています。今年のクリスマスを思い出しながら、一年をふり返りたいと思います。ローマ・カトリック教会では、2024年12月24日から「聖年」と呼ばれる特別な期間が続いていて、2026年1月6日の「主の公現日」に終わると言われています。私たちの教会の暦も、一年の終わりと始まりの中で、神さまの恵みを思い出す時です。

この一年、良いこともありました。でも、つらいこともいろいろあったと思います。病気。別れ。心配。思うようにいかないこと。私たちは、つらい出来事は、できれば忘れないものです。早く消えてほしい、と思います。

けれど、きょうのメッセージの題は、「悲しみを忘れない」です。なぜ、悲しみを忘れないのでしょうか。それは、暗い気持ちで生きるためではありません。

むしろ、神さまの恵みを、しっかり心に留めるためです。

イザヤ書63章7節に、こうあります。

「わたしは心に留める。主の慈しみと、主の栄誉を。

主がわたしたちに賜った、すべてのことを。」

イザヤは、「主の慈しみを、心に留める」と言います。

慈しみとは、やさしさ、あわれみ、助けの心です。

ここで大切なのは、イザヤが、楽しい思い出だけを集めているのではない、ということです。イスラエルの人びとは、つらい経験もしていました。その中で、イザヤは言います。

「それでも私は、主の慈しみを心に留める。」

そして、63章9節に、こういう言葉があります。

「彼らの悩みのとき、主もまた悩まれた。」

神さまは、遠くから見ておられる方ではありません。苦しむ人と、いっしょに苦しめる方です。このことが、クリスマスの出来事でも、はっきり示されます。イエスさまの誕生をは、明るい話だけで終わりません。

ヨセフは夢で知らされて、幼いイエスさまを連れて、エジプトへ逃げました。そして、ヘロデ王の命令で、ベツレヘムで幼い子どもたちが殺される、恐ろしい出来事が起こりました。

クリスマスの喜びのすぐそばに、こんな悲しみが書かれている。これは、とても大切なことです。神さまは、この世界の悲しみを「なかったこと」になさいません。神さまは悲しみを消してから救うではありません。

悲しみのただ中に来てくださいます。そこに、光をともしてくださいます。

ヘブライ人への手紙2章も、同じことを語ります。イエスさまは、私たちと同じ「肉と血」

を受けて、この世界に来られました。身体が持つ痛みを受け、血を流しながら救いの道を歩まれました。だからイエスさまは、苦しむ人の痛みをご存知です。弱い人の心を理解されます。また試練の中にいる人を、助けることがお出来になります。だから私たちは、悲しみを忘れません。

では、「悲しみを忘れない」とは、どういうことでしょうか。

一つ目。

悲しみを、神さまの前に置くということです。

無理に元気なふりをしなくていい。

「つらいです」「苦しいです」と祈っていい。

言葉にならないなら、黙って祈ってもいい。

神さまは、それを受け止めてくださいます。

二つ目。

悲しんでいる人のそばに立つということです。

聖書は、幼いイエスさまが逃げた、と語ります。

イエスさまは、最初から、追われる人の側に立ってくださった。

だから教会も、苦しむ人を、見捨てない。

できることは小さくてもいい。

祈る。声をかける。支える。助けの手を探す。

それが、主の光を運ぶことになります。

三つ目。

神さまの慈しみを、心に留め続けるということです。

悲しみを忘れないのは、絶望するためではありません。

「主は共に苦しんでくださる」

「主は見捨てない」

「主は救いを備えてくださる」

この恵みを、忘れないためです。

きょう、私たちは、一年をふり返っています。

心に残る喜びも、悲しみも、主の前に持って来ましょう。

そして、悲しみを抱えたままでも、主の慈しみを心に留めて、新しい年へ歩み出しましょう。

暗闇を歩むすべての人の上に、平和の希望が与えられますように。

その行く道を照らし、恐れと苦しみから守ってくださいますように。

主の御名によって祈ります。アーメン。